

他のビジョンの例

目次

- 1 . 新・生物多様性国家戦略（パンフレット抜粋）・・・・・・・・・・ 2
- 2 . 循環型社会のイメージ（3つのシナリオ）・・・・・・・・・・ 6
- 3 . 環境保全長期計画（抜粋）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- 4 . 福岡県環境総合基本計画（概要版・抜粋）・・・・・・・・・・ 14
- 5 . 未来生活懇談会報告書（抜粋）・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- 6 . 通商産業政策ビジョン（70年代ビジョン）（抜粋）・・・・ 24

新・生物多様性国家戦略（平成14年3月）
パンフレット「いのちは創れない」・抜粋

国土のグランドデザイン——つくり上げる国土のイメージ

「新・生物多様性国家戦略」に掲げられた「グランドデザイン」とは、国土を単なる土地の広がりとしてとらえるのではなく、地下から空中、地下水、海洋まで、そして土壌の微生物から空を飛ぶ鳥までを国土としてとらえ、将来像を示そうとするものです。

こうした将来像を、100年、200年がかりでつくり上げていこうというのが、「グランドデザイン」の呼びかけていることです。最後に未来の国土のイメージを描いてみます。



魚捕り 写真：佐野祥子

- 1 自然が優先される地域として奥山・脊梁^{せきりょう}山脈地域、人間・人間活動が優先する地域として都市地域があり、その中間に、人間と自然の関係が新しい仕組みで調和した地域として、広大な里地里山地域が広がっている。
- 2 道路、河川、海岸などの整備が、生物の多様性・緑の回復のための縦軸・横軸のしっかりとしたネットワークとして位置づけられ、奥山、里地里山、都市を結んでいる。
- 3 住民・市民が、自分の意志と価値観によって生物多様性の保全・管理、再生・修復に参加し、生物の多様性がもたらすゆたかさを享受し、そうした行動を通じて新しいライフスタイルを確立している。
- 4 数千、数万kmも離れた遠い国から飛んできた鳥たちが、そこここの森や干潟で遊び、餌^{えさ}をついばむ。

白神山地の紅葉

青森県・秋田県にまたがる白神山地の原生的なブナ林は、世界自然遺産に登録されている。写真：三好和義





ハルニレ 北海道豊頃町 写真：佐藤三典

- 5 北の千島列島や赤道近くから流れてきた海流は、ゆたかな生命を育んで大漁をもたらし、子どもたちは潮干狩りや磯遊びに目をかがやかせる。南の島のサンゴ礁にはあざやかな彩りのさまざまな魚が群れ、青々と茂る海草のあいだをジュゴンの群れが過ぎていく。
- 6 奥山だけでなく里地里山、都市にも巨木がそびえ、大都市にも大きな森があり、猛禽類が悠々と空を舞っている。
- 7 都市、町や村に、生き物たちのにぎわいがあり、人々は生き物たちとのふれあいを通して生活のにぎわい、ゆたかさを感じる。



ザトウクジラ 東京都小笠原沖
写真：千葉 幸

循環型社会のイメージ (3 つのシナリオ)

循環型社会のイメージ【3つのシナリオ】

ひとえに循環型社会といっても、その言葉から想像される社会は様々です。このため、循環型社会形成推進基本計画の策定課程では、循環型社会のイメージとして3つのシナリオを示しています。

シナリオA「技術開発推進型シナリオ」



シナリオAは「技術開発推進型シナリオ」で極めて高度な工業化社会となり、廃棄物等は品目別毎に収集され、高度化した静脈物流システムにより集積され、廃棄物発電などのサーマルリサイクルも活発化します。

シナリオB「ライフスタイル変革型シナリオ」



シナリオBは「ライフスタイル変革型シナリオ」で生活のペースをスローダウンし、家の手入れや家庭菜園などの園芸を行ったり、ものを修理しつつ大事に使う生産的消費者へ変化します。また、地域活動への参加、地産地消といった小さな経済で充足感を得る社会となります。

シナリオC「環境産業発展型シナリオ」



シナリオCは「環境産業発展型シナリオ」で環境効率性(eco-efficiency)が高く、産業の高次化が進展します。環境産業の発展により経済成長もしながら、そのような産業が供給する環境配慮型製品やサービスにより暮らしの面でも環境負荷が低減します。

平成15年版循環型社会白書より抜粋

環境保全長期計画（昭和52年5月）
抜粋

序 計画の目的

(1) 昭和75年(2000年)には、我が国では、1億3,000万人を超える人々が、37万平方キロの国土に生活を営むことになるものと予想されている。加速度的に変転する現代社会において、今後25年間に、生活にどのような変化が生ずるか、予想の域を超えるものであるが、この生活が健康で文化的なものでなければならないことはいうまでもない。

すべての人間活動は、人間の幸せな生活のために奉仕するもので、物質、自然、文化、その他のあらゆるものの豊かさも、それが人の幸を構成する要素として欠かすことができないものであるために尊いのであって、それぞれがそれ自体として究極の目的ではあり得ない。その中で、環境問題は、人間の生命にかかわりをもつ重要な要素として人間生活全般に及ぶ広い視野と将来の展望のもとに、各般の政策に組込まれていく必要がある。

(2) 我が国の公害行政は、各種規制法の整備と基本的な環境保全目標の設定を終え、いまや設定した目標の達成を図っていかなければならない時期を迎えている。

戦後における高度経済成長の結果、我が国の所得水準はほぼ西欧水準に達し、生活の物的な豊かさは飛躍的に向上したが、一方で様々なひずみを生じ、なかでも最も深刻化した問題は加速度的に悪化した環境汚染とそれによる健康被害であった。しかし、生活の質的向上を重視する国民の欲求を背景として、45年に至って公害対策基本法をはじめとする公害関係諸法の改正、整備が行われるとともに、人の健康を保護し、生活環境を保全する上で維持することが望ましい環境質の目標となる環境基準が設定、強化されるなど、公害対策は画期的に充実強化されてきた。この結果、最近においては一部の汚染物質について著しい改善が見られるようになってきているが、設定された環境基準を達成し、維持していくためには、今後更に、国、地方公共団体、事業者、国民の各般がそれぞれの責務を遂行していかなければならない。

しかし、50年代に入って、我が国の経済はその基調において高度成長から安定成長へと移行し、企業収益の低下、財政収入の確保難など多くの問題に直面することとなると予想される。このような状況のもとで将来における環境保全の展望をその

ために要する費用とともに明らかにし、国民の理解と協力のもとに環境行政を推進することがますます重要となってきた。

(3) 我が国の自然環境は、経済の高度成長の過程を通じ、急速に悪化してきた。このため、経済成長優先の考え方に対する反省が生まれるとともに、環境保全に対する国民の欲求も公害による被害の防止にとどまらず、快適な生活環境、良好な自然環境の保全へと高まってきた。

このような国民の欲求を背景として、46年、環境庁に自然環境保全行政担当局を設置したことに引き続き、47年に自然環境の保全に関する基本法である自然環境保全法を制定し、更に、自然環境保全基本方針の閣議決定、自然環境保全のための基礎調査の実施、自然環境保全地域等の指定など、自然環境保全政策の確立を図ってきたが、今後においては、長期的視野に立った総合的な環境保全政策の確立が望まれている。

(4) このような背景は、我が国の将来の環境行政の展望を明らかにする長期計画の作成を求めているものといえることができる。

この計画に求められている役割の第1は、環境基準に対応する汚染負荷量などを示し、将来の予測される経済活動によって生ずる汚染発生量との関連において、環境基準等の目標達成のために必要な政策課題を明らかにすることである。

第2は、長期的、総合的視野の下で環境行政を推進するために、国及び地方公共団体が実施すべき施策を明確にするとともに、経済成長、産業構造、地域構造、交通体系等の環境に影響を与える諸施策について、環境保全の観点から十分な配慮を加えていく指針を提示することである。

第3は、目標達成のために要する公害防止費用をその経済的影響とともに明らかにし、経済成長の減速が予想される状況のもとで、限りある資源のなかから公害防止に対して必要とされる資金を計画的に確保していくことである。特に目標達成のために要する費用とその経済的影響を明らかにし、関係者の理解と協力のもとに施策を推進する基礎を固めることが大切である。

第4は、自然環境の保護と改善、十分な緑地の確保等快適な生活環境を達成維持するために、国又は地方公共団体が自然環境保全のために実施すべき施策の方向を現時点における知見に基づいてできるだけ明確にするとともに、自然環境保全関連施策の決定実施にあたって、自然環境保全上配慮すべき事項、自然環境保全に関す

る各種施策の総合的調整の指針等を明らかにすることである。また、国民の理解と協力を得て、自然環境の保護と改善に向けて民間活動を誘導することを目的としている。

なお、この計画は、昭和60年を目標年次とする当面10カ年に関する計画であるが、可能な限り、55年の中間目標に関する諸数値を提示することとする。

福岡県環境総合基本計画（平成15年3月）
概要版・抜粋

＜福岡県の環境の5本の柱ごとのめざす姿＞

福岡県の環境をかたちづくる5本の柱ごとに、それぞれめざす姿（ビジョン）を次のように描いています。

(1) 「自然環境の保全と創造」に関するビジョン

- 筑前・豊前・有明の3つの海に注ぎ込む川の流域ごとにすぐれた自然環境が広がり、都市地域でも緑地や水辺が確保されています。
- 数多くの身近な自然とのふれあいの場や機会に恵まれています。
- 農地や里山など、さまざまな自然との関わりを通して、自然環境と共生した事業活動や生活が定着しています。

(2) 「生活環境の保全」に関するビジョン

- 水循環の確保をとおして、きれいで豊かな水と多様な生態系が各地で維持されています。
- さわやかな空気、きれいでおいしい水、安らぎの音環境など私たちの日常生活を取り巻く環境が、県民みんなの取組により安心して心地よい状態に保たれています。

(3) 「循環型社会の形成」に関するビジョン

- ものを大切に、資源を効率的に利用して廃棄物を減らす社会づくりが進んでいます。
- 2つのエコタウン地域を中心に、環境産業が新たな産業として発展し、廃棄物等のリサイクル・有効利用の仕組みができています。
- 不法投棄がなく、県民が安心できる適正な処理が行われています。

(4) 「地球環境問題への取組」に関するビジョン

- 便利さと活力を保ちながら、日常生活や経済活動から排出される二酸化炭素等を少なくする仕組みが定着しています。
- 国際機関やNPOなどと連携して、本県に蓄積された環境技術などが、アジア・太平洋地域の国々のために役立っています。

(5) 「各主体の自主的な環境保全の取組とネットワーク化」に関するビジョン

- 環境について正しく学び、みんなが、自らの日々の行動が環境にさまざまな影響を与えていることに気づき、心づかいを持って行動しています。
- さまざまな環境活動の輪が県内各地に広がり、快適な環境づくりが進められています。

＜みんなをめざす10年後の福岡県の環境＞

10年後（2012年頃）の福岡県に時間旅行をして「この基本計画でめざす10年後の福岡県の姿」を、ある家族の生活を通して見てみましょう。

私は、10年後の福岡県のあるまちに住んでいる37歳の会社員です。36歳の妻、10歳の長女（小学校4年生）、7歳の長男（小学校2年生）、66歳の父、60歳の母と2世帯対応型の集合住宅で暮らしています。



私 妻と長女 母 父

2003年の私の家族



私 妻と長女 母と長男 父

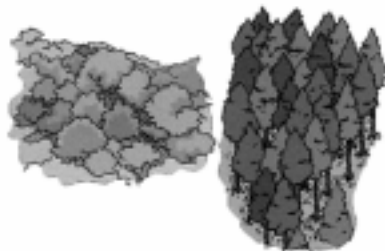
2012年の私の家族

(1) 「自然環境の保全と創造」

がみんなの力でわかれている / 10年後にめざす自然環境の姿

○2012年頃の初夏、私は中国での静脈物流システムづくりの共同事業の打合せを終えて、飛行機で空港に降り立とうとしている。空から見えるふくおかのまちは、人と自然が隣り合い、深く関わり合って住むまちなんだなと改めて実感する。

○山々を見ると、よく手入れされたスギ・ヒノキの人工林や広葉樹の森林が広がっている。以前は、手入れが追いつかずに荒れていた山もあったが、今では充実した森林組合やボランティア組織の手で、ほとんどの山で十分な管理や植林がなされている。木々に湿っていて、山あいの水田に青々とした稲が伸びている姿も見える。山々が、こんなふうに元気だと、水源地としての働きも十二分に期待できるというものだ。

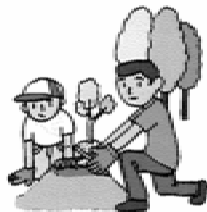


○家に帰った私は、父母が近所の貸し農園で作った野菜をかじりながら、子ども達からそれぞれ学校の自然観察キャンプに行った話を聞いた。7歳の長男は、博多湾の干潟でたくさんの野鳥を見たと興奮して話した。10歳の長女は、平尾台の草原に行き、きれいなチョウを見たとはしゃいでいた。さっそくインターネットで調べてみると、そのチョウは、10年前には絶滅しかかったようだが、保護のための活動の結果、最近では、以前よりも姿を見る機会は多くなったのだという。

○明日は、家族みんなで植林ボランティアに出かける日だ。ふくおかの自然は、わたしたちの先祖の生活との関わりの中でその豊かな姿を育んできた。その営みをわたしたちも続けていこう。と私は思った。



(2) 「生活環境の保全」 がみんなの力で行われている／10年後にめざす空気・水・土などの姿



○私と家族は、植林ボランティア活動にやってきた。今日は、他の民間団体と合同で小石原村の山に木を植えている。その中には、福岡市の団体や漁民の団体も入っている。不思議がる長男に、「福岡市は筑後川から水を引いているし、海でたくさんの魚がとれるのも、豊かな山が豊かな川の流れを育てているからなんだ。だからわたしたちもここに木を植えるのを手伝っているんだよ」とメンバーの1人が教えてくれた。

○水の循環に興味を持った長男にせがまれて、私たちはエコカーシェアリングで借りてきた低公害車で筑後川の河口まで行ってみることにした。一緒に来ていた3家族もそれぞれ遠賀川、今川、那珂川を下ってみることにした。

○さらに下って、最下流の柳川市に入り、掘割を横目で見ながら有明海に注ぐ河口に着いた。他の川を下っていた3家族からも携帯電話で、それぞれ響灘、周防灘、博多湾に着いたと連絡があった。それぞれの海の水は泳ぎたくなるほどきれいだったということだった。もちろん有明海もそうだ。「こんなにきれいな海を通じてアジアの国とつながっているんだね。」と長女が感慨深げに言った。

○帰り道は、すっかり暗くなっていた。郊外の道からでも、夜空にはくっきりと星が瞬いているのが見えた。

(3) 「循環型社会の形成」 がみんなの力で行われている／10年後にめざす資源や廃棄物との関わり方



○次の日の朝。みんなでご飯と近所で採れた野菜がふんだんに入ったみそ汁を食べた。我が家はエコクッキングを徹底しているので、生ごみはあまり出ない。今日はごみの日なので、長女と長男はごみ出しを手伝った。

○私が住むまちの分別区分数は、10年前は4分別だったが、リサイクルシステムの進展に伴って、今では15分別になり、資源の有効利用が図られている。子どもたちは、物心ついたころから分別の習慣ができていたので、全く苦にならない様子だ。

○一方、私は、仕事で北九州エコタウンに来ていた。ある事業所で廃棄物となったものを別の事業所の原料として運ぶのが私の仕事だ。この10年間、福岡県内では全国に先駆けてさまざまなリサイクル技術の開発・実用化が進み、この仕事への需要はますます高まっている。県内の環境産業全体が急成長しているのだ。



○そういえば大牟田エコタウンに数年前に進出した環境関連企業に技術者として勤めている従妹から来週遊びに来ると連絡があった。私のまちで毎週のように開催されて、掘り出し物がたくさんあると評判のフリーマーケットに従妹を案内してやろう。と私は考えた。



(4) 「地球環境問題への取組」

がみんなの力でされている／10年後にめざす地球環境保全のあり方



○私は、震災に並ぶ風力発電設備を横目に北九州エコタウンを後にした。こうした新エネルギーを利用した都市づくりが、県内の多くのまちで進められていて、今や新エネルギーは大切な電力の供給源となっている。

○私が事務所にもどってみると、県の地球温暖化防止活動推進センターから紹介された省エネアドバイザーが、会社のみんなに省エネ方法のアドバイスをしているところだった。アドバイザーは、県内のいろいろな事業所から引っ張りだこだという。

○仕事が終わりと、私は、低公害バスに乗って家に帰った。家に着くと、私はエアコンをつけた。最近エアコンを最新の省エネタイプにかえたので、省エネナビ（屋内用のエネルギー使用量モニター）に示される電力消費金額のメーター数値がその分小さくなっている。効果が目に見えると省エネしやすいものだ。我が家で環境家計簿を10年間つけ続けているのもそれが理由だ。

○寝る前にみたテレビでは、京都議定書で約束した2012年度までの日本の温室効果ガス削減目標6%をなんとか達成できたというニュースが報じられていた。しかし、地球温暖化がそれで完全にとまるわけではない。この目標達成を第1ステップにして、我が家でも取組を続けていこう。と私は思った。

(5) 「各主体の自主的な環境保全の取組とネットワーク化」

がみんなの力でされている／10年後にめざすわたしたちの環境学習や環境保全活動の姿

○次の日の午前中、私は会社で、5年前に取得した環境管理の国際規格ISO14001の本年度の更新のため、各部署を回って環境への取組を確認した。取組は完全に定着しているようだ。今日の結果をまとめ、さっそく環境報告書の作成に取りかかろうと思う。そういえば、おとなりの従業員10人の会社も、中小企業向けの環境管理システムを使って取組を行っていて先週、取組の結果を環境報告書としてホームページで公開していた。

○妻は、半年前から取り組んでいた植林ボランティア団体のホームページが完成し、今日、県の環境ホームページに登録した。パソコンから県のホームページにアクセスしてみると、簡単に自分たちのホームページにたどりつく。これなら、多くの人に自分たちの活動を知ってもらえる。と妻は仲間たちと喜び合った。



○午後から私は、太宰府市で開かれているNPOの主催するイベントに参加した。100以上の民間団体や事業者が参加していて、いくつかのテーマに分かれ、各団体が協働しての活動方針を話し合った。福岡県内での環境を守る自主的取組とパートナーシップ※はますます広がり深まりを見せている。

○福岡県の環境は、21世紀が始まったばかりの10年前に比べ著実によくなってきた。これからもよりよい環境に向かって、県内に暮らすみんなの力を合わせて前進していこう。

詳しくは計画書または県のHPをご覧ください

未来生活懇談会報告書（14年12月） 抜粋

【未来生活懇談会】

人口構造の変化、IT化の進展等の時代の潮流変化を踏まえ、構造改革を通じてすべての国民が生きがいのある人生を送ることができるような「未来の生活」を実現するために、内閣官房長官と経済財政政策担当大臣の共催で平成14年5～12月に開催された懇談会。

- ・未来生活を描いてみよう
(2030年頃に至るまでの期間を念頭に置いた生活の変化)

(住まいをとりまく環境の変化1)

住民参加で新しいまちづくり

堀尾有美さんはNPO法人のスタッフとして、市役所の総合カウンターで受付案内をする傍ら、さまざまなまちづくり活動に参加しています。行政側も市民の力を積極的に活用して、質の高い行政サービスを提供しています。

～よりよいまちづくりへの思いを持つ人に～

NPO法人のスタッフ、堀尾有美さん(25歳)は、都心から西へ30キロ、昨年、多摩地区の4市が合併して誕生した“ガーデンシティ市”の閑静な住宅地に両親と住んでいます。有美さんは、午前中はガーデンシティ市役所1階の総合カウンターで受付案内をする傍ら、午後はNPO法人「むさしのの自然と環境を守る緑の会」のスタッフとして、さまざまなまちづくり活動を行っています。

有美さんが、自然や環境に関心を持ち始めたのは、学生時代に初めて訪れたイギリスで、ロンドン郊外の美しい田園風景を知ってからです。ロンドンの中心部から北に30キロ、車を1時間も走らせると、緩やかな勾配のある野原に牛や羊が草を喰む風景が、夢のように現れるのです。美しく広がる田園風景の中で、「都市と田園が巧みに共存する、豊かで、理想的な都市生活が日本でも実現できないだろうか」と考えたことが、NPO法人で活動するきっかけになりました。

有美さんが活動するNPO法人は、発足当初は、緑地や緑道、野川などの環境美化が主な活動でした。しかし、現在では、これらの活動に加え、ガーデンシティ市が行う都市計画事業にかかるコンサルタント業務や、市民運動公園、市民植物公園の管理事務などの行政サービスの代行業務などを行っています。特に近年は、行政が市民の力を積極的に活用し、質の高い行政サービスを提供するようになり、ガーデンシティ市では、多くの市民に行政への参加を呼びかけ、また登用を行っています。すでに市民ホールや図書館、老人福祉センターなども、NPO法人をはじめとする市民団体に業務委託をするようになってきました。有美さんが市役所で受付案内をしているのもこのためです。

現在、有美さんは、身近にあるみどりを守り育てる運動「100万本緑化運動」を進めるとともに、他の市民団体や、市民らとともに、ガーデンシティ市のまちづくりセンターから事業委託を受け、みどりに関する新しいしくみを考える「エコビレッジ構想」づくりに取り組んでいます。NPO法人は、新たな公益活動の担い手として、環境をはじめ、子育てや介護、防災、犯罪防止など、生活にかかわるさまざまな分野で、行政や企業のパートナーとして、重要な役割を担っています。

(住まい選びの変化2)

週末田舎暮らしで自然を満喫する

神奈川県川崎市に住む上杉さんは、甲斐駒ヶ岳山麓で週末田舎暮らしを始めて10年になります。3年前、甲斐駒ヶ岳山麓に古い農家を再生して、老後になってもそのまま住み続けられるように配慮した“草庵”を完成させました。

～都会の喧騒から離れ大自然の中で癒されたい人に～

神奈川県川崎市内の分譲マンションに住む会社員、上杉五郎さん(51歳)一家が、週末田舎暮らしを始めるきっかけとなったのは、今から10年以上前になります。

それは、その頃まだ小学生だった長男の健斗さん(20歳)と長女の美紀さん(19歳)、さらに妻の陽子さん(48歳)とで参加したグリーン・ツーリズムでの体験でした。夏休みを利用し、農村に出かけ、農村生活を体験することは当時すでに一般的になっていましたが、上杉さん一家は初めて参加したツアーで、甲斐駒ヶ岳山麓の自然にすっかり魅了されてしまいました。北に八ヶ岳、西に甲斐駒ヶ岳、景色が素晴らしい上に、空気も、水も、米も美味しい。上杉さん一家は朝から林を分け、川で泳ぎ、鱒を釣り、田舎生活を存分に味わい、そして、3年前について甲斐駒ヶ岳山麓に“草庵”を完成させました。300坪の土地に35坪の平屋建。地元の古い農家を再生した、いぶし瓦葺きの伝統的な日本家屋です。グリーン・ツーリズムで親しくなった農家を介して、地元の「古民家再生の会」に話を通してもらったところ、話がトントン拍子に進みました。

柱や梁は150年以上も前の昔のもので、冬になれば、薪ストーブと囲炉裏で暖をとります。しかし、上杉さん一家の自慢はこれだけではありません。密かな自慢は、老後になってもそのまま住み続けられるように配慮した住宅仕様です。将来の車椅子生活も考え、家の中はいっさい段差をなくし、廊下やトイレは車椅子が使えるように広く、また浴室・トイレは壁面に握り棒をつけるなど、さまざまな点で配慮を施しています。そして、それが住宅の品質確保の促進等に関する法律で定められた日本住宅性能表示制度で“優良”住宅の格付けがされています。現在、バリアフリー等の条件はすでにスタンダードになっていますが、数年前から、新築住宅に加えて、中古住宅もその対象となり、住宅市場の中でそれに応じた評価がなされるようになってきています。上杉さん一家は現在、土曜日から日曜の夕方まで“田舎生活”を満喫していますが、セカンドライフは、自然あふれるこの豊かな大地でと考えています。

通商産業政策ビジョン（70年代）
（昭和46年5月）・抜粋

序 説

各時代はそれぞれに特有の条件と課題によって性格づけられている。

1945年8月15日から始まる4分の1世紀は、日本の歴史の上に、ひとつの明らかな時代を画した。天明の飢饉、応仁の大乱を思わせる飢餓と、焦土の巷から、20余年の間に、みずからもいぶかるほどの、「GNP大国」が作りだされた。

この大国は、たしかに、多くの欠陥や矛盾を内包している。しかし、それにもかかわらず、これを20余年の古の荒廃とくらべるとき、われわれは、われわれ日本人がなすとげた事業の偉大さに印象づけられるのである。

かつて、われわれが、まず望んだことは、飢寒の克服であった。次に望んだことは、一面では、より豊かな物質生活の享受であり、他面では、欧米の後塵を拝したくないという明治以来の国民的向上心の満足であった。第1の望みは昭和20年代にほぼ充足される。昭和30年代以降になると、第2の望みを達成するべく、国民的な努力が払われ、欧米諸国がいうところの「日本経済の奇跡」が実現された。

なぜ、このような奇跡が実現のものとなりえたのか。その過程の全面的な解明は、なお今後の研究にまたねばならない。

しかし、われわれは、ともかく、これだけのことをなすとげたことに対して、相応のほこりをもってよいであろう。産業と産業政策もまた、この嵐と波の時代、民族的飛躍の時代に、その成功の一端をになった。われわれは、今日、世界一流の重化学工業をもっている。昭和24年、360円レート設定の年、わずか5億ドルに過ぎなかった輸出は、今や、200億ドルを突破するに至っている。この間、日本国民は、窮乏し、耐乏し、貯蓄した。この貯蓄の大きな部分が重化学工業における投資に積極的に誘導され、その結果鉄鋼、家電等精強な産業が育成されたのである。これらの産業の発展は、いうまでもなく、雇傭と所得の飛躍的増大をもたらした。かくして、後発工業国、窮乏敗戦国という二重の負担およびその克服という歴史的課題はみごとに解決され、その結果われわれの哀歓を塗り込めたひとつの時代が終わろうとしている。それはたんに戦後の終わりではなく、明治100年の終わりでもあ

る。黒船に驚倒した日本は、今や、世界最大の黒船輸出国となった。明治の人々が夢にも望みえなかったことがすでに平凡な事実となっている。

さて、ひとつの時代の終わりは、新しい時代の誕生を促す。ひとつの時代が嘗々として作りあげた成果と、その裏側に蓄積された矛盾や硬直が、次の時代をよびおこすのである。

今まで、われわれは、はるかな「坂の上の雲」をみつめて、細いけわしいひとすじの坂道をわき目もふらずにのぼってきた。その努力の上に、日本経済は今、ひとつの峠に立って、広い世界をみはるかすに至っている。

今や、国民の基礎的な欲望が充足される結果、たんなる「もの」ではなくて、「より美しいもの」さらには、きれいな水、澄んだ空気、住みよい都市、心づかいの行きとどいた国土、あるいは生活の安定感、仕事の充実感等を求めて、国民の欲求はまさに百花撩乱のおもむきを呈している。

したがって、産業は「もの」と公害とを同時併産してもよいというような単細胞的思考行動様式を離脱し、知恵の限りをつくして、この多彩な欲求に対応することが要請されるに至っている。

(以下略)